Wine Books

四季歌ごよみ

大岡信

夏

四季歌

夏

江苏工业学院图书馆
藏书章

大岡信

●目次

時鳥（ほととぎす）……5
五月雨（さみだれ）……33
海山（うみやま）……61

夏祭（なつまつり）……113
蝉（せみ）……141
夏のうた詞華集……170
●フォト・イメージ●夏のうた……89

●カバー・表紙作品
芹沢銈介

●写真
丹地保堯 2-3 100-101 112
飯島正広 60
松浦和夫 88
津田洋甫 89 92-93 187
登野城 弘 90-91
森下 恭 94-95
湯地定正 96-97 98-99
竹内敏信 102-103
寺島彰由 104-105
宮嶋康彦 106-107
柳 英児 108-109
高橋宣之 110-111
室町昌彦 130-131
大塚高雄 158-159
新納有太郎 180
キユウ フォト インターナショナル
ダンディ・フォト
ネイチャー・プロダクション
はなや光画荘
フォトニカ
リーブラ株式会社

●資料撮影
原 耕平

●装幀
内藤安彦

●レイアウト
吉田カツヨ
仲田延子

●編集協力
深瀬サキ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

時鳥

ほととぎす

芭蕉に少なからぬ影響を与えた俳人として、山口素堂という江戸前期の俳人の名を知る人もあるだろう。だが、そのことを知らなくとも、「目には青葉　山時鳥　初鰹」の句を耳にし、ふと口にのせた記憶のある人は多いにちがいない。

黒潮にのって南から北へ回遊してくる鰹の味については、いわゆる青葉の季節にとれる伊豆、相模沖のものより、秋の三陸沖でとれるもどり鰹の方がよいともいうが、いずれにせよ、青葉や鰹、それに時鳥は、夏の到来になくてはならない日本の初夏の景物だった。

卯の花の　にほふ垣根に
時鳥　早も来鳴きて
忍音もらす　夏は来ぬ

一般に小学唱歌として知られている、佐佐木信綱作詞の「夏は来ぬ」である。この唱歌は五番まであるが、たとえ二番以下は忘れてしまっていても、この一番の歌詞

は歌えるという人も多かろう。この唱歌を小学校で教わった頃は、「ホトトギス」が「ハヤモキナキテ　シノビネモラス」というあたりの、意味はよく分からないのに、妙に快く入ってくる語感には魅力を感じたものだった。

佐佐木信綱は明治・大正・昭和三代にわたって、歌人として、歌学者として巨大な業績を積みあげた人だが、この「夏は来ぬ」を作詞した当時は、弱冠二十四、五歳の青年だった。このぴたりと身についた古典的な言葉の調べの美しさは脱帽ものだと長い間私は敬服してきたものである。ところがある時、鎌倉末期女流歌人の第一人者永福門院の歌集を読んでいて、信綱作詞の唱歌との関係についてはたと思い当る歌に出会ったのである。

ほととぎす空に声して卯の花の
垣根もしろく月ぞ出でぬる

若き日の信綱は、小学生のための唱歌の作詞を依嘱された時、こういう古典の秀歌を踏まえてそれに新しい息吹きを吹きこむことを考えたのであろう。彼はそれを

みごとに実現した。もっとも、門院の歌では空に声した時鳥が、唱歌では卯の花（空木の花）の白く咲く垣根にやって来て忍び音をもらすという変化になっている（事実として時鳥が人家の垣根まで来て鳴くことがあるかどうか、多少問題はあろう）。忍び音という言葉は何やら艶めいた感じも与えるが、古来の日本人の考えでは時鳥は春先山深く姿を隠して鳴くということになっていたので、「忍び音」は時鳥を形容する言葉の一つでもある。もっともむかしは鳥の分類も厳密ではなかったから、郭公や筒鳥、十一（古名では慈悲心鳥ともいう）というような同じホトトギス科の鳥と混同されていたことも多かったようである。

「初音」「初声」という語も、ウグイスとホトトギスについてだけいわれるものだが、これもこの二種類の鳥が鳴きはじめるのを待つ心が、日本人には特別に深かったからである。『古今和歌集』の夏の歌は三十四首であるが、そのうち時鳥を詠んだもの二十八首、九割近い多さである。その『古今和歌集』の巻頭歌。

わがやどの池の藤波さきにけり
山郭公いつか来鳴かむ　【よみ人しらず】

「わがやど」の「やど」に「宿」の字を当てる本もあるが、意味としては「屋外」、つまり庭のこと。平安朝の貴族の邸宅は、寝殿造の家屋に庭という様式だった。庭には池が造られ、そこに松や藤など四季折々の花や樹木を植えて楽しんだのである。「藤波」の「波」は池の縁語で、「藤波」は藤の花盛りをさす。

「山郭公いつか来鳴かむ」。時鳥は春渡来する渡り鳥だが、山に囲まれた京都に住む当時の貴族は、花の咲きほこる時期に鳴きはじめる時鳥を、花を慕って山からやってくると考え、「ヤマホトトギス」と呼び慣わした。しかも、花を慕ってやってくる鳥というものを少しずらして考えると、花であるところの女を慕って通ってくる男のイメージに重なる。動植物を擬人化して考えることを好んだそのころの人々にとって、時鳥は歌の題材としては活用範囲の広い、空想を刺戟される鳥だったのである。

おもしろいことに、この歌の左註には「このうた、ある人のいはく、かきのもとの人まろがなり」と書かれている。この歌は、ある人の言うところでは、柿本人麻呂の作であるそうだ、という註であるが、人麻呂の時代には自邸の庭に池を造る平安朝の建築様式はない。

朝霞たなびく野辺にあしひきの
山霍公鳥いつか来鳴かむ　【よみ人しらず】

藤波の繁りは過ぎぬあしひきの
山霍公鳥などか来鳴かぬ　【掾久米朝臣広縄】

いずれも『万葉集』の時鳥の歌で、この時代にも時鳥と藤の花は深い関わりで詠まれている。しかし、これらの『万葉集』歌に詠まれている藤の花は、庭に咲くものではなく野原に咲いているものだった。『古今和歌集』の「わがやど」の藤の花に見られ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るような場所の限定はまだあり得なかったといっていいだろう。

こんなところから考えてみても、巻頭歌の柿本人麻呂歌説は成立しない。しかし、当時すでに歌の聖と仰がれていた人麻呂を重んじた『古今和歌集』の撰者たちが、人麻呂歌と伝承される歌に巻頭歌という晴れの席をもうけたというのなら、これはうなずけることである。

鎌倉時代初期の『新古今和歌集』でも、「夏歌」全百十首のうち、ほととぎすを詠んだ歌は三十二首にのぼり、全体の三割弱を占める。冬・秋・春の雪・月・花とともに、時鳥が夏を代表する景物とされていたことを実地に示す数字である。

◉待ち客聞く郭公といへるこころを

郭公まだうちとけぬしのびねは
来ぬ人を待つわれのみぞ聞く　【白河院】

「時鳥」の初音、すなわち「しのびね」が、来るはずなのにやって来ない人を心待ちにしている、人知れぬつらい思いとイメージにおいて重なり合っていることはいうま

でもない。初音を「しのびね」と言いならわす所には、「忍ぶ」思い、また「忍んで来る人」といった観念が当然結びついていた。この白河院御製は題詠で、題の中には「客」という言葉をかかげているだけの夏歌であるにもかかわらず、歌そのものは訪れてくる恋人を待ちに待っている女心を余情にした恋歌とよめるものである。

聞かでただ寝なましものを時鳥
なかなかなりや夜半の一こゑ　【相模】

いかにせむ来ぬ夜あまたの時鳥
待たじと思へば村雨の空　【藤原家隆】

「時鳥」が「恋」を連想させ、余情として持つ鳥であったことがこれらの歌によってよくわかるだろう。歌人たちが好んでうたったのも、これと深い関係がある。

篠懸樹かげ行く女らが眼蓋に
血しほいろさし夏さりにけり

【中村憲吉】

昭和九年四十六歳で没した「アララギ」の歌人。三十代の初めころから、人生を受容する態度の深化とともに歌風は沈潜的となり、ある澄んだ境地へ達した。第一歌集は島木赤彦との共著『馬鈴薯の花』。第二歌集『林泉集』になると、都会の景情を官能的に歌ったみずみずしい歌が多い。これもそのひとつで、二十五歳の時の作。

「夏さりにけり」のサリ(去り)は、古くは近づく意味にも使った語で、この場合もその用法。ほのかにまぶたを紅潮させて、すずかけの街路樹の下を一群れになってゆく乙女らの初夏。青春の感傷が横溢している。

……『林泉集』(大正五年刊)

越後屋に衣さく音や更衣

【榎本其角】

「越後屋」は江戸前期一六七三年に日本橋駿河町に開店した呉服屋で、現在の三越の前身に当る。現金掛値なし、切売りという薄利多売の商法で人気を博した。衣がえの季節、店頭には客が群らがり、絹布がピピッと裂かれて切売りされている。まさに大江戸の初夏。

蕉門の俊才其角は、元禄時代の江戸っ子気質を奔放華麗に詠んだ俳人で、漢語調を用いて俳諧の革新をねらった俳書『虚栗』を編み、初期蕉風の確立に貢献した。師芭蕉の閑寂の風とは対象的に都会風で伊達好みだった。実生活でも酒と遊里を愛した豪放闊達な粋人。初夏の昼、粋な心が呉服屋の賑わいのかたわらを通り過ぎたのである。……『浮世の北』

白牡丹といふといへども紅ほのか

【高浜虚子】

牡丹の花は艶麗豪華な紅の花という印象が強い。確かに大輪の花が幾重にも花弁を重ねて咲く姿には、中国で花の王とまで称えられただけの威厳が感じられる。しかし虚子はここでは白牡丹を詠んでいる。白かと見ればほのかに紅をさしている、その隠れた美のあり方に深く感じたのである。

虚子は「小さなもの」「かすかなもの」「一瞬に生滅するもの」「ものの局部」を凝視し、小なるものを写して大を描く方法を完成した。そこから思いがけないイメージが生まれる。単なる写生の達しえないところを、そのような方法でとらえ、究極、写生の醍醐味ともいうべき現実を描く。

……『五百句』(昭和十二年刊)

ぼうたんの百のゆるるは湯のやうに

【森　澄雄】

牡丹園を見ているところだろうか。柔らかい初夏の風が吹いて過ぎる。牡丹の花弁はこまかい波紋の連なりのように身をゆする。「湯のやうに」の比喩が意表をつくが、「ゆるる」以下のヤ行の音を媒介にして、現実にゆれる花と、作者の、そして句を読む読者の心のゆらぎを一挙に包みにくるような感触が伝わる。虚子に「ゆらぎ見ゆ百の椿が三百に」という句があり、それと似たところのある題材だが、こちらの句の比喩はさすがに現代俳句である。「湯のやうに」の一見奇抜な感覚表現は、揺れる湯という万人熟知の肉体感覚に融和されて、みずみずしい現実感を生んでいる。……『鯉素』（昭和五十二年刊）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com